

訪問城の説明

吉田城（豊橋城, 吉祥郭, 峯野城, 鹵雑城）（なし）（豊橋市今橋町）

戦国時代の16世紀初頭にその前身が築城され、16世紀末に大改築が行われた。戦国時代には三河支配の重要拠点の1つとして機能し、江戸時代には吉田藩の政庁としての役割を果たした。別の城名としては、築城当初に今橋城と呼ばれ、明治維新後には、吉田から豊橋の改名に伴い豊橋城とも呼ばれた。

永正2年（1505年）に宝飯郡の長山一色城主・牧野古白が今川氏親の命により、渥美郡馬見塚村（豊橋市今橋町。現在の同市馬見塚町とは位置が異なる。）の入道ヶ淵に臨む岡に築城したとされる。築城目的は、西三河で勢力を広げつつあった安祥城の松平長親による東三河進出に備えるため、もしくは、その松平氏の縁戚としての友好関係を保持しながら渥美郡全域で勢いをつけていた戸田宗光を警戒するためのもの、と考えられている。

翌永正3年（1506年）松平氏と今川氏の戦いの後、牧野古白・野瀬丹波が討死。今橋城から近い東方の二連木城（豊橋市仁連木町）や半島の田原城に拠点を持つ戸田氏と、牧野氏が争奪戦を繰り返すため城主が次々と入れ替わった。

享禄2年（1529年）、西三河から松平清康（長親の孫）が進出し吉田城を攻略。戸田氏まで屈服させて、三河支配権を、ほぼ確立させた。しかし、天文4年（1535年）には清康が横死して松平氏の直臣の城番が撤退、かわって非直臣の城番の一人牧野成敏がそのまま城主となるが、天文6年（1537年）には牧野氏を追った戸田宣成が城主となった。

天文15年（1546年）、牛窪城主（長山一色城主）の牧野保成の要請を請けて今川氏が戸田宣成を攻めて吉田城を陥落させ、これを管理下に置いた。今川氏が直接支配に乗り出したことで東三河における最重要戦略拠点となった。

今川義元は駿河から城代に伊藤左近・後に小原鎮実を派遣。支配力を強化する為、東三河の国衆にも城代を補佐させて統治協力を強いた。その後、松平氏の弱体化によって新たに今川氏の統治下に組み込まれた岡崎城を後方から支える責務も負った。だが、永禄3年（1560年）5月、今川義元が桶狭間の戦いで討たれると支配力を低下、次第に歯止めが利かなくなる。永禄8年（1565年）には、今川氏を離反した松平家康によって攻略され、小原鎮実は退避。今川氏は三河支配権を喪失する。

豊川を後背地とする背水の陣となるのを嫌ったのか、家康は本城として用いずに信任の厚い重臣の酒井忠次を城代に任命。並びに、南方の田原城の城代に本多広孝を配置。吉田城を中心とし戸田氏や牧野氏、西郷氏などの東三河4郡の諸豪族を統率させた。永禄11年（1568年）末からの遠江侵攻では、掛川城を攻囲するまでの東三河衆は酒井忠次の指揮の下、家康本隊とは別行動であった。

遠江を併呑した当初、まだ本格的ではなかった武田氏との対戦が想定され、城の北方では設楽郡の長篠城・野田城が、東方では遠州の浜松城・二俣城・高天神城などが牙城となった。

その武田氏とは、元亀2年（1572年）より天正10年（1582年）に至るまで攻防戦を三・遠の両国で繰り広げるが、天正3年（1575年）の長篠の戦いまでは徳川氏が劣勢であった。特に元亀2年の春には設楽郡の防衛網を容易に突破した武田軍が南進。吉田城下にまで押し寄せられるが、頑強に守り抜いた。その後も城代・酒井忠次を旗頭とする東三河国衆が武田氏による東三河・西遠江への侵略対応に心血を注いだ。

天正18年（1590年）、豊臣秀吉により家康が関東に移封されると、池田照政が東三河4郡を統べる15万2千石の城主となった。

照政は吉田城および城下町の大改築や吉田大橋（豊橋）の架け替えを行った。整備は11年間にわたって行われたが、関ヶ原の戦いの翌年慶長6年（1601年）に照政は播州・姫路に移封された。現存する城跡は近世城郭ではあるが、照政の統治下では完成しなかった。

幕藩体制の下で吉田城に三河吉田藩の藩庁が置かれた。ただし、東海道の重要な防衛拠点の1つに挙げられていたため、江戸幕府の老中・大坂城代・京都所司代格など有能な譜代大名が城主に選ばれ出世城などと呼ばれていた。竹谷松平家をはじめ、深溝松平家や水野氏、小笠原氏など3万から8万石の譜代大名のみに託されるが、国替えは頻繁であった。そのため、ほとんどの藩主は菩提寺を吉田に造らず、唯一の藩主の菩提寺は小笠原家四代の廟の有る臨濟寺〔通称、殿様寺（とのさまでら）。豊橋市東田町〕のみである。最後に入ったのは、大河内松平家である。

明治維新後、松平信古（後の子爵大河内信古）が明治2年（1869年）に版籍奉還したため、明治政府下の豊橋城（豊橋藩）となり、明治4年（1871年）、敷地は兵部省の管轄となった。明治6年（1873年）、失火により多くの建物が焼失した。また、城趾内に名古屋鎮台の豊橋分営所が設置され、明治8年（1875年）には大日本帝国陸軍歩兵第18連隊が置かれた。

太平洋戦争後、三の丸内側は一部を除き豊橋公園として整備され、本丸には1954年（昭和29年）に隅櫓（鉄櫓）が模擬再建された。隅櫓（鉄櫓）の中は簡易的な資料館となっている。また美術館やスポーツ施設、文化会館などが整備されている。また、豊橋市役所（豊橋市今橋町1番地）も三の丸に立地している。

以前は、豊橋まつり開催時のみ無料で隅櫓（鉄櫓）へ入館出来たが、2012年現在は毎週日曜日にも開館されている。

二連木（にれんぎ）城（なし）（仁連木城）（豊橋市仁連木町）大口公園

二連木城（にれんぎじょう）は、朝倉川南岸の三河国渥美郡の北の端に有った戦国時代の城（現、愛知県豊橋市仁連木町）である。「楡（にれ）の木」から名が付いたと言われ、仁連木城とも書く。

築城したのは明応2年（1493年）で戸田氏中興の祖戸田宗光（全久）である。

戸田宗光は、京都の室町幕府政所執事の伊勢貞親に仕えていた。三河国守護の細川成之から三河国額田郡で狼藉を働く者の鎮圧願いが出され、8代将軍足利義政は戸田宗光と義父松平信光に命を下した。宗光は義父松平信光と共に賊の首をあげ京へ送ったが、宗光は三河国で勢力を持ち始める。応仁の乱〔応仁元年（1467年）～文明9年（1477年）〕が始まり、群雄割拠の時代が来ると、文明7年（1475年）、渥美郡大津城（豊橋市老津町）に入り、文明9年（1477年）郡代一色政照を渥美郡大草村（愛知県田原市）に隠居させ、政照の養子分になることで郡の統治権を得る。文明12年（1480年）に田原城（田原市）を築城する。

明応2年（1493年）、豊川北岸の郡である宝飯郡長山一色城（現、豊川市牛久保町）で、主君一色時家を討ち君臨していた波多野時政（全慶）と、同じ故一色時家家臣牧野成時（古白）は灰野原の戦いを起こしていた。宝飯郡で大混乱の年、渥美郡の北の端である朝倉川沿いの丘の上に二連木城を築城し、宗光は二連木城へ移る。これによって、二連木城を渥美郡北部の根城とし、息子の憲光に譲った田原城と共に戸田家の中心拠点となる。そして、戸田宗光は渥美郡完全制圧を図る。

永正5年（1508年）、戸田氏中興の祖・戸田宗光は没し、子の憲光は亡父宗光のために二連木城の近くに全久院（豊橋市東郷町）を建立した。

天正18年（1590年）最後の二連木城主戸田康長（戸田松平家の祖で松平姓を受ける）は徳川家康の関八州へ移封と共に去り、二連木城は主を失った。しかし、松平姓を受け、徳川松平一族と同格となった仁連木戸田家は宗家を名乗り、田原戸田家は分家となる。

この年、この東三河地域（当時、4郡で総石15万2000石）へ入った池田照政（播磨国姫路城へ移封時に輝政と改名）は吉田城を拠点とし、二連木城を廃城とした。

明応2年（1493年）に灰野原の戦いで勝利した牧野成時（古白入道）は豊川の東岸へ渡り、二連木城の西1km半ほどの所に永正2年（1505年）今橋城（後に吉田城に改名。現在の豊橋市今橋町）を築いた。

しかし、戸田氏と二連木城にとってみれば、憂慮する事態である。渥美郡（豊川・朝倉川南岸）の完全なる支配を目論む戸田氏には、隣郡の宝飯郡から牧野氏が、わざわざ豊川を越えてまで築いてきた今橋城の存在は目障りでしかなかった。そもそも今橋城の大手門は、築城時には東へ向けられていた。すなわち、東に在った二連木城への対抗を意図した城砦であることは明白である。

同じ朝倉川南岸で近くに有るが、北の朝倉川方面から二連木城を見れば明らかに小山でありこの辺りで一番高い地点であるのに対し、今橋城（吉田城）は豊川・朝倉川の合流地点ではあるが、西に対しては少々高い地点であるものの南や東に対しては完全なる平城となっていた。この後、戸田氏は今橋城攻略に力を注ぎ始めた。

形態が異なる城のそれぞれの支配者、二連木城の戸田氏と、今橋城の牧野氏は築城の翌年（1506年）に激突、古白は敗死した。しかしこれは両氏による度重なる抗争の始まりでしなく、目まぐるしく替わる支配権の奪い合いで、対立を深めた。やがて、これに西三河の松平氏も加わり、三つ巴の今橋城争奪の抗争は熾烈をきわめた。それは吉田城と改名後も同じである。

その吉田城争奪戦が沈静化するのには、今川義元が三河国の本格支配に乗り出した頃である。吉田城を入手した今川氏は、城代を派遣し三河支配の拠点と定めた。だが、永禄3年（1560年）5月の桶狭間の戦いで義元討ち死によって、支配力に陰りが出始めた。

その頃、吉田城城代として置かれていた大原資良（小原という文書も残る）と懇意となった二連木城主 戸田重貞は、永禄7年（1564年）に吉田城から人質となっていた母の奪還に成功、徳川家康陣営へ転属した。この為、二連木城（徳川陣営の戸田氏）と吉田城（今川氏）は再び敵対関係に陥った。

大崎城（豊橋市船渡町）

永正三年（1506）十一月、田原城主（二代）戸田憲光は今川氏親と和を結び、共同して牧野古白の吉田城（今橋城）を落とした。これより、戸田氏と牧野氏の吉田城をめぐる因縁の戦いが繰り返されることとなる。

吉田城を手中にした戸田憲光は次男金七郎宣成を城主にして守らせた。

それから十二年後の永正十五年（1518）、牧野氏は今川氏との関係を修復して今川の大軍とともに吉田城を囲み、城の明渡しを戸田氏に迫った。牧野勢を率いたのは古白の遺児といわれる信成である。

城主戸田宣成は退城を余儀なくされ、城を明渡した。その胸中を察するならば口惜しさに満ちていたに違いない。

城を退城して一旦は田原城に戻った宣成であったが、牧野氏の領土拡張を阻止するために、ここ大崎の地に城を築いて城主となった。これがこの大崎城である。吉田城奪還を胸に秘め、自ら境目の最前線に立ったのだといえよう。

城は梅田川が三河湾に注ぐ河口部の高台を利用して築かれた。築城には近在の村から人足が徴発された。現在の八幡社の裏に残る堀跡には杉山堀の名が伝えられている。杉山村（豊橋市杉山町）の人たちによって掘られたものであろうとされている。

享禄二年（1529）、驍将松平清康による東三河進攻によって吉田城が落ち、城主牧野信成は討死した。その行くところ敵なしの勢いによって周辺の諸豪たちはこぞってその膝下に参じ、田原城主（四代）戸田宗光も清康に降った。

松平勢によって落とされた吉田城は、松平方に通じた牧野成敏が城主となった。

ところが、松平清康は天文四年（1535）に守山で横死してしまい、その後の松平勢力は急速に減退した。

しかも、駿河の今川義元も遠江の平定に忙しく、三河どころではなくなっていた。つまり、東三河から東西の二大勢力がともに影響力を失った空白の時期が生まれたのである。

大崎城の戸田宣成はこの空白の時期を逃さなかった。天文六年(1537)、宣成は吉田城を襲った。牧野成敏を追い出して奪還を果たしたのである。まさに雌伏二十年、耐え続けてきた甲斐があったというものであろう。

しかし、戸田宣成の吉田城主としての期間は長くは続かなかった。今川氏が遠江の平定を終え、西三河の松平氏の求めもあって三河進出に乗り出して来たのである。天文十五年(1546)、今川義元の命を受けた天野安芸守の吉田城攻撃によって宣成は城を枕に討死して果てたのであった。その翌年には戸田氏の本拠田原城も今川勢によって落とされ、田原城の戸田氏は滅んだ。

戸田氏の去った大崎城はその後放置されていたが、慶長六年(1601)に旗本中島重好がここに陣屋を構え、九代続いて明治に至っている。

大津城（高縄城，老津城）（豊橋市老津町字西高縄）老津駅南へ徒歩 5 分

大津城（おおつじょう）とは、戦国時代、愛知県豊橋市老津町にあった城である。高縄城（たかなわじょう）とも言う。現在の地名に合わせて「老津城」という表記もある。

戸田全久入道（宗光）が三河国渥美郡に最初に入った拠点である。現在の豊橋市立家政高等専修学校の周辺にあたり、学校の北や西に堀や土塁が現存する。

老津町は元来**大津**と呼ばれていたが、明治 11 年（1871 年）の郡区町村編制法とともに愛知県渥美郡老津村に改名した。由来は紫式部の「老津島 島守る神や 諫むらん 波もさはがめ 童べの浦」にちなむ。

ちなみに、老津町内にあった波入江城と北浦城は、大津城より北西の方角に位置した。また、波入江城は祥雲寺境内の一带にあったとされる。

文明 7 年（1475 年）、松平信光の娘婿で三河国碧海郡上野に拠点を置いていた戸田宗光が知多郡河和経由で東三河の渥美郡に進出し、大津城（高縄城）に入るが文明 11 年（1479 年）戸田宗光、大津から田原へ移る。文明 13 年（1481 年）渥美郡代の一色七郎が没し、戸田宗光は田原城（同県田原市）を築き、そちらへ移った。

明応 2 年（1493 年）、宗光は渥美郡支配を強めるために、同郡の北端に新築した二連木城（同県豊橋市仁連木町）へ移り住み、子の戸田憲光に田原城主を譲る。大津城の役割は一時、低下する。その後、永世 2 年（1505 年）、牧野古白吉田川（河川・豊川の旧名）の西岸から牧野氏が渥美郡に進出し、今橋城を築いて戸田氏に対抗する。戸田氏と牧野氏の覇権争いの決着を見ずに、宗光は明応 9 年（1500 年）、船形山の戦い（普門寺）で今川に討ち取られ死去するものの、戸田氏は大津城は今橋城への対抗上、田原城と二連木城の連携に欠かせない城として再び重要度が高まった。この後たびたび吉田、田原で戦が起こり、拠点として使われたとされる。

大津城は吉田城と田原の城のほぼ中間点に当たる城であったため重要視されていたが、江戸幕府が発布した一国一城令により廃城となった。

田原城（巴江城）（なし）（田原市田原町巴江 11-1）

戦国期から江戸期の城。江戸時代には田原藩 1 万 2 千石の藩庁であった。

文明 12 年（1480 年）ころに戸田宗光（全久）によって築城され、戸田氏の三河湾支配の拠点となった。16 世紀になると近隣の戦国大名の拡大に伴って、はじめは松平氏に属し、さらに今川氏に転じた。天文 16 年（1547 年）、戸田康光のとき、人質として今川氏の本拠地駿河国に送られる松平氏の嫡男竹千代（後の徳川家康。康光は義母の父に当たる）を護送する任を受けるも、寝返って竹千代を今川

氏の敵方の織田信秀に送ってしまったため今川義元の怒りを買って、田原城は今川方の攻撃を受けて落城、城主康光も戦死した。

その後今川氏に属する城代が入るが、桶狭間の戦いの後、今川氏から自立した家康によって攻略され、松平氏譜代の本多広孝が城主に入って、東三河の旗頭として吉田城（豊橋市）を与えられた酒井忠次の指揮下に入った。さらに天正18年（1590年）、家康が関東へと移封すると代わって吉田城に入封した池田輝政の持ち城となり、田原城には重臣筆頭の伊木忠次が城主となって田原に在城した。輝政の統治期に、石垣の修築や曲輪の整備などが行われたと考えられる。

江戸時代になると、田原城には三河の他の主な城と同様に譜代大名が置かれ、1万石そこそこ少ないながらも藩を形成した。はじめ田原戸田家の支族、戸田尊次が入り、その後寛文4年（1664年）に三宅氏が1万2千石で入封、そのまま明治維新を迎えるまで200年強支配した。三宅氏は、現在、最高裁判所の別名の三宅坂で名を残す。廃藩置県後の明治5年（1872年）、他の多くの城と同様に田原城の建築物も取り壊された。

海に面した小さな丘に築かれており、海や水堀に囲まれた城郭の形状から別名を巴江城という。

築城当時は東側から北周りに西側にかけて海に面し、巴型に水堀を張り巡らせて主郭を守った。16世紀はじめの戸田氏は渥美郡全域（現在の田原市から豊橋市の豊川・朝倉川南岸まで）及び知多半島の一部を領有していた。渥美半島のみならず三河湾の海上支配をもくろみ、半島の中ほどにあり海に面した田原城を本拠としたのである。また、戸田氏が半島内に築城した老津城・大崎城・二連木城はいずれも三河湾または三河湾に注ぎ込む朝倉川に面しており、戸田氏が海上支配を重視していたことがよくわかる。

天正18年（1590年）池田輝政が東三河に入ると、本拠地を吉田城に構え、田原城も城代として入った伊木忠次によって整備がなされた。現在残る曲輪の配置や石垣などは基本的にはこの時期か、池田氏の後に入った戸田氏によってなされたものと考えられている。江戸時代になると田原城の南側に城下町が形成された。また、17世紀後半ころに田原城の東側の大きな入り江に大規模な干拓が行われ、海に面していた田原城本丸は陸地にむき出しとなり、現在に至っている。また、一部の武家屋敷や藩校・成章館などを囲むように外郭も形成されていた。明治初年に撮影された古写真によると、主郭の壁は海鼠壁となっており、二ノ丸の櫓は層塔式二階建てのものとなっている（現在再建されたものとは形状が異なる）。

石垣を初めとした遺構は多く残るが、建物は昭和以降の再建である。また、城地の多くは地域住民の公共的な施設になっている。内郭は、本丸が三宅氏の家祖である南朝の忠臣児島高德を祀る巴江神社になっており、9月半ばには年に一度の祭りが大々的に行なわれて、地区住民のシンボルとなっている。この神社は、三宅氏が文化年間に二ノ丸に建立した社から、魂を移したものである。二ノ丸には二ノ丸櫓が再建されているが、古写真で見ると櫓は下見板張となっており、過去にあったものとは異なる外見となっている。郭内は田原市博物館となっているが、1990年代の博物館建設の際、施設と通路の再整備のために多くの遺構を崩してしまったことは批判も受けている。なお、博物館建設以前は町立保育所となっていた。三ノ丸は護国神社となっており、併せて渡辺崋山・村上範致・岡田虎次郎など郷土の偉人の顕彰碑が建設されている。

そのほか、大手門が再建されているが、やや装飾過剰なようである。石垣は16世紀と思われる野面積みのものがそのまま残っている。石も田原市北部から産出する石灰岩が混ざっていて、地域性が出ている。

城の外郭にも長らく土盛りなどが残っていたが、近年の再開発で多くは崩されてしまった。現在でも田原中部小学校の南側にわずかながら石垣と土盛りが残されている。

藩校の成章館の跡は田原中部小学校となり、またその北側に渡辺嶺山を主神とする嶺山神社を建設した。なお、藩校の成章館の名は、田原城の西郊にある愛知県立成章高等学校に引き継がれている。また、城の南側・西側などの道は当時武家屋敷が並んでいたところで、再開発で道の多くはなくなったり拡幅されてしまったが、一部に城下町の風情を残している。

掛川城(懸川城, 懸河城, 雲霧城, 松尾城) (国重文) (掛川市掛川 1138-24)

戦国時代には東海道を扼する遠江国東部の中心、拠点として掛川はしばしば争奪戦の舞台となった。朝比奈氏によって逆川の北沿岸にある龍頭山に築かれたとされ、現在見られる城郭の構造の基本的な部分は安土桃山時代に同地に入封した山内一豊によるものである。

本丸を中心に、西に搦手、南東に大手を開き、北に天守曲輪である天守丸、その北に竹之丸、南に松尾曲輪、西に中の丸、東に二ノ丸と三ノ丸、その南を惣構えで囲んだ梯郭式の平山城であった。明治以降は、廃城令によって廃城処分とされ建物の一部を残して撤去され、道路や庁舎の建設によって大半の遺構が撤去されている。現在は、1854年に倒壊した天守や一部の建物、塀が復元され、堀や土塁、石塁の復元が行われている。城跡の整備が城下に至り、電柱の埋設など都市景観の配慮に及んだ。室町時代中期の文明(1469年 - 1487年)年間に守護大名・今川義忠が、重臣の朝比奈泰熙に命じて築城したと伝えられている。

そのまま朝比奈氏が城代を務め、泰熙の子孫である朝比奈泰能・朝比奈泰朝が代々城を預かった。ところが、1568年(永禄11年)、朝比奈氏の主家の今川氏が甲斐国の武田信玄・三河国の徳川家康の両大名から挟み撃ちに遭い、当主の今川氏真は本拠地たる駿府館を捨てて、朝比奈泰朝のいる掛川城に逃げ延びた。このため、掛川城は徳川勢の包囲に遭うが、泰朝は城を守ってなかなか落城しなかった。しかし、多勢に無勢もあり、和議で主君氏真の身の無事を家康に認めさせると、泰朝は開城を決断した。

氏真と泰朝は1569年2月8日(永禄12年1月23日)に掛川城を開き、相模国の小田原城へ退去し、掛川城には城代として家康の重臣・石川家成・康通親子が入った。間もなく駿河国に入った武田信玄が徳川家康と敵対し、掛川城に程近い牧之原台地に諏訪原城を築き、さらに掛川城の南方にある高天神城では武田・徳川両氏の激しい攻防戦の舞台となった。しかし掛川城は1582年(天正10年)の武田氏の滅亡まで徳川氏の領有であり続けた。

その後も掛川城は石川氏が城代を務めたが、1590年(天正18年)に家康が東海から関東に移封されると、掛川城には豊臣秀吉の直臣であった山内一豊が5万1千石(のち5万9千石)で入った。一豊は掛川城の大幅な拡張を実施し、石垣・瓦葺の建築物・天守など近世城郭としての体裁を整えた城郭とした。

1600年(慶長5年)の関ヶ原の戦いの後、一豊は土佐一国を与えられて高知城に移転した。その後、掛川城には多くの譜代大名が入ったが、最終的には太田氏(太田道灌の一族の系列)が入り、何度か城の修築も行われている。

ところが、幕末の1854年(安政元年)末に、東海地方一帯を大地震が襲い(安政東海地震)、掛川城も天守を含む大半の建物が倒壊した。この際、政務所である二ノ丸御殿は1861年(文久元年)までに再建されたが、天守は再建されることはなかった。

掛川古城(掛川城・天王山城) (掛川市掛川 1104 龍華院本堂)

文明年(1469-87)間、駿河の今川義忠が遠州への侵攻拠点として、家臣朝比奈泰熙に築城させたとされ

ている。

今川義忠は、応仁・文明の乱では東軍に属していたが、西軍である美濃斎藤氏の押さえを期待して遠州掛川郷を与えたと考えられる。

朝比奈氏は今川氏の重臣で、今川氏の先兵として掛川郷に送り込まれたと考えられる。

泰熙は天王山(子角山)を中心として広い範囲に築城し、これを掛川城と呼んだ。

朝比奈氏はこの掛川城を拠点として遠州攻略を進め、遠州の今川氏支配を磐石のものとしていった。

その後泰熙は、龍頭山に新たな城を築城し、永正 10(1514)年には掛川新城が完成して本拠を移した。

大永 2(1522)年、掛川城を訪れた連歌師の宗長は、手記に築城中であることを綴っている。

永禄 11(1568)年、武田信玄の攻撃によって駿府の館を逃れた今川氏真是、重臣の朝比奈泰朝を頼って掛川に逃れてきた。

同年、徳川家康が遠州に侵攻し、掛川城に籠城した泰朝と氏真を攻撃するとなった。

翌 12 年、家康は掛川古城の天王山に猛攻を加えてこれを奪取し、掛川城攻略の本陣とした。

5 月になると、今川氏真・朝比奈泰朝の両名は小田原城の北条氏を頼って落ちていった。

これによって掛川古城は完全に廃された。

明暦元(1655)年、掛川城主北条氏重によって、掛川古城本丸跡に徳川家光の霊牌が勧請されて霊廟大猷院殿霊廟が建てられた。

掛川古城は、掛川城址の北西側に位置し、本丸跡には大猷院殿霊廟が置かれている。

本丸西側一段下がったところは、現在では龍華院本堂が置かれているが、二曲輪であったと考えられる。

本丸東側には土塁の跡が残されており、その東側には大堀切が良好に残されている。

その東側は、現在では公園であるが、往時は曲輪であった事がはっきりとわかる。

横須賀城(松尾城, 両頭城) (国の史跡) (掛川市西大淵)

戦国時代から江戸時代にあった城。平城。徳川家康は武田氏の高天神城を締め付ける付城群の中核として、大須賀康高に命じて築いた城郭である。大須賀家 2 代の後、渡瀬家 1 代、有馬家 1 代、その後、再び大須賀家 2 代となるが除封され、能見(松平)家 2 代、井上家 2 代、本多家 1 代とめまぐるしく藩主が代わり、西尾忠成が 2 万 5 千石で入封し、以後 7 代をもって明治維新を迎える。

西尾家歴代の藩主のなかで忠尚は名君の誉れ高く、若年寄を勤め 5 千石加増され、都合 3 万 5 千石になり、老中も勤めている。

横須賀城の特徴は他に類を見ない天竜川より運ばれた玉石垣を用いた築城法である。天守閣は三層四階であった。宝永年間に起こった大地震のため湊が隆起してしまい、用水路を作って凌いだ。

石垣、堀、土塁等が残り、現在公園として整備されている。国の史跡に指定されている。また、不開門が城跡の北西にある撰要寺に、町番所が市役所大須賀支所北側に、それぞれ移築され現存している。これらの移築建造物は、掛川市文化財に指定されている。このほか、袋井市の油山寺には旧御殿の一部が移築されている。

馬伏塚城(爬塚城) (袋井市岡山字今城)

馬伏塚城の築城時期はよく判っていないが、室町中期頃には既に砦があったと思われる。

文明 5(1473)年に懸革荘が足利義政から今川義忠に与えられ、遠江進出を狙う今川氏の橋頭堡となった。

文亀元(1501)年、駿河国守護今川氏親と遠江守護であった斯波氏が遠江の覇権を巡って激突したが、斯波氏が敗れて今川氏の勢力が伸張した。

こした中、三輪、岡崎、清ヶ谷、横須賀の四郷を今川氏から与えられて馬伏塚城に入城したのが小笠原長高であると伝えられている。

高天神小笠原家譜には、長高は信濃府中小笠原氏 15 代貞朝の長子であったが、父貞朝が次子長棟に家督を継がせようとしたために不和となり信濃を出奔、三河吉良氏を頼った。

長高は吉良義堯の女を娶って吉良氏の一家となったが、妻と長男を伴なって今川氏へ仕え、馬伏塚城を与えられたと記されている。

しかし、信頼できる資料には長高という名はなく、遠江小笠原氏が史料に登場する初名は小笠原右京進春茂である。

いずれが正しいかを軽々に判断する事はできないが、応仁の乱の際に今川義忠の軍に小笠原氏の名が見えることから、信濃小笠原氏の一族であるとしても、もっと早い段階で別れた支流ではないかと考える事もできそうである。

花倉の乱では、春茂は梅岳承芳(義元)に味方し、福島正成の高天神城を攻め落した功により、高天神城を与えられて二城の城主となった。

今川義元が桶狭間合戦で討死し、嫡男の氏真が後を継ぐと、今川氏の勢力にも陰りが見えてくる。三河で独立した徳川家康が三河を統一し遠江を伺うだけではなく、北からは武田信玄が駿河・遠江に圧力を加えてくる事となった。

その頃本城を高天神城に移していた氏興(氏清)は、永禄 11(1568)年、遂に今川氏を見限り徳川氏に服する事とした。これにより、馬伏塚城も徳川氏の勢力に組み込まれた。

天正 2(1574)年、氏興の嫡男長忠(氏助)は、武田勝頼の猛攻に高天神城を開城してこの地を去ったため、馬伏塚城は家康が接收するところとなった。

家康は家臣の大須賀康高を城主に命じて高天神城攻略の拠点として城の大改修を行なった。

天正 6(1578)年、康高は更に高天神城の近くに横須賀城を築城して城主として移ったため、天正 8(1580)年、新たにその後詰の城として高力清長が入城した。

天正 9(1581)年、高天神城が徳川軍の攻撃で落城すると、馬伏塚城の重要性は失われたため、翌天正 10 年、清長は駿河田中城に移されて馬伏塚城は廃城とされた。

城址は本丸付近の土塁と空堀が、諏訪神社とその周辺に辛うじて残されているが、多くは圃状整備によって失われて田圃となっている。

諏訪神社の建つ所は少し高い土塁となっており、櫓台であったと考えて良いであろう。

案内板には現在の地形との対比図も記されている。

切通しとなっている本丸土塁断面は圧巻である。